

## 阮籍の「東平賦」について

沼 口 勝

### 一 序

「詠懷詩」の作者として知られる魏の阮籍(二一〇—二六三)には、「東平賦」「首陽山賦」「鳩賦」「獼猴賦」「清思賦」及び「元父賦」の六篇の賦の作品が現存する。そしてこれら阮賦の諸篇が、いづれもなかなか興味深い内容と特徴とを具えることは、例えば劉師培(一八八四—一九一九)の著『中國中古文學史』に、「大抵語は重く意は奇にして、頗る華采を事とす、其の意旨の寄する所なり。」と指摘するごとくである。阮賦は阮籍研究において等閑視し得ぬ重要性をもつということができる。

ところで、従来阮賦に對する言及は、「詠懷詩」及びその他の阮籍の文に對するそれのごとく充分には行なわれなかつたように見える。ようやく近年、阮賦に對する研究は見るべき成果を挙げつつあるといえるが、問題とすべき點はまだ多く殘されている。

そこで私はこの小稿において、阮賦六篇の中、最も多様かつ複雑な内容をもつ、最も重要な作品と思われる「東平賦」をとりあげ、鄙見を述べたいと思う。

なお、本文の底本として明末の人張溥の編になる『漢魏六朝百三名

家集(光緒十八年、善化章經濟堂重刊)中の『阮步兵集』を用いた。また、最近刊行された『阮籍集』(一九七八年五月、上海古籍出版社)を參考とした。この『阮籍集』は、その「出版説明」によれば、明の嘉靖間(一五二一—一五六六)に陳徳文・范欽の刻した二卷本の『阮嗣宗集』を底本とし、萬曆・天啓間(一五七三—一六二七)に汪士賢が輯刻した『漢魏諸名家集』中の『阮嗣宗集』以下の諸本を以て校したものである。また、この陳・范刊本は、通行の明刻『阮籍集』の中で最も早いものともいう。

### 二 「東平賦」の背景

阮籍が「東平賦」を制作する契機となつたのは、司馬昭(晉の文帝)に自ら請うて東平郡(郡治は無鹽)の太守となり、その地に赴任したことであつた。

『世說新語』任誕篇、劉孝標の注に引く『文士傳』に次のようにい

籍放誕、有傲世情、不樂仕宦。晉文帝親愛籍、恒與談戲、任其所欲、不迫以職事。籍常從容曰、平生曾遊東平、樂其土風、願得爲東平太守。文帝說從其意。籍使騎驢徑到郡、皆壞府舍諸壁障、使内外

相望、然後教令清寧、十餘日、便復騎驢去。

それでは、阮籍が東平太守となり、その地に赴任したのはいつになのであろうか。

『晉書』本傳の記述は、右の東平太守志願の一條を「文帝輔政するに及んで、籍嘗て從容として帝に言ひて曰く、……」として引いており、正元二年（二五五）、兄司馬師の没後、司馬昭がその實權を引き継いでからのことであるとす。

『世説新語』任誕篇に、阮籍が母の喪にありながら、司馬昭の前で酒肉を飲食し、同席した司隸校尉の何曾から彈劾された記事がある。左にその文を掲げる。

阮籍遭母喪、在晉文王坐、進酒肉。司隸何曾亦在坐曰、明公方以孝治天下、而阮籍以重喪顯於公坐、飲酒食肉。宜流之海外以正風教。

文王曰、嗣宗毀頓如此、君不能共憂之何謂。且有疾而飲酒食肉、固喪禮也。籍飲噉不輟、神色自若。

何曾は、嘉平中（二四九—二五〇）に司隸校尉となり、正元中（二五四—二五六年五月）に尙書に遷り、鎮北將軍となつてゐることが、その本傳（『晉書』三十三）により明らかである。松本幸男氏が、これらのことから阮籍の母の死を正元二年のこととされ、さらに阮籍が服喪の期間を経て東平太守となつたことを甘露三年（二五八）ごろとされるのは、蓋し妥當な推定といふべきであらう。

この甘露三年という年は、前年五月、淮南に據つて兵を擧げた諸葛誕の反亂が二月に平定され、五月には天子から司馬昭に、「相國と爲し、晉公に封じ、食邑八郡、之に九錫を加う」る旨の詔命があり、司馬昭がこれを「前後九たび讓つて乃ち止む」といふ、魏晉間の禪讓劇の開始された年である。すなわち天下が司馬氏のものであることの明

阮籍の「東平賦」について

らかになつた年といえよう。

それでは、自ら太守の職を志願し、驢馬に騎り、任地に着くや府舎の壁障をこわして内外ともまる見え同然にし、そして十餘日間の滞在の後、飄然として去つたという阮籍のこの奇行の目的は、いったいどこにあつたのであろうか。

私の推測では、阮籍にとつて、太守として赴任した事實が残り、しかも政治に對して自分は全く興味も關心もないことを、司馬昭始め天下に示すことができれば、それで目的を果したことになるのだと思う。要するに、司馬氏の政治權力の傘下に自分がはつきりと所屬する意のあることを、さり氣なく司馬昭らに示す意圖から出た行動であつたのであろう。

これが、司馬昭をして「至愼の人」と評せしめた阮籍の、放誕を装いながら實は愼重に考慮された結果の政治的行爲の意味であつたと、私は考へる。

### 三 「東平賦」の内容(一)

「東平賦」は、主部百六十二句と、「重曰」の亂辭を以て始まる展開部六十四句とからなる作品である。

主部の内容は、人類の居住する所謂「九州」の地そのものが、その誕生の過程において混亂と不均衡とをもつたこと、その結果、人類の世界もまた、感亂と不均衡とをその根源において共有する不幸な存在であること、そしてこれに反し、「九州」の地から隔絶した極遠の地には、平和と自由と安息との保證された別天地、神仙世界の存在する可能性のあることが、最初に述べられる。

次に、東平の地について、その地理的、歴史的環境と住民の氣質、

風俗、および生活とが活寫され、彼等らが政治や教育の力によって矯正し得る者ではないことへの烈しい厭惡感が語られる。ここで注意すべきは、東平が單なる固有の地としてではなく、「九州」の典型としてとりあげられていることである。したがって、東平に對する作者の厭惡の情は、人間、わけても俗人に對する厭惡の情を表わすものと思われる。

かくして、人間(俗人)の世界に絶望した阮籍の魂は、その安息と自由とを求め、神仙世界へと飛翔しようとする。その憧憬と希求のこゝとばを以て主部を締め括るのである。

以上の説明によつて、「東平賦」の主部の構想が、汚濁の現實世界との葛藤に疲れた屈原の魂が、理想の世界を求め天上に飛翔することとを歌う、かの「離騷」に何がしか似ることに氣づくであろう。事實、「東平賦」は、その形式、用語において、「離騷」を始めとする『楚辭』の諸篇に學ぶ點が多い。

今、以下に、「東平賦」の内容を分析、論述するが、用語については、これを詳細に説明する餘裕をもっていない。用語の説明については、拙稿「阮籍東平賦譯註初稿(上・下)」に譲りたいと思う。

それでは、主部を八段落に分け、それぞれの内容について論述したい。

(第一段)

- 1 夫九州有方圓
- 2 九野有形勢
- 3 區域高下
- 4 物有其制
- 5 開之則通
- 6 塞之則否
- 7 流之則行
- 8 壅之則止
- 9 崇之則成邱陵
- 10 汗之則爲藪澤

- 11 逶迤漫衍
- 12 繞以大壑
- 13 及至分之國邑
- 14 樹之表物
- 15 四時儀其象
- 16 陰陽暢其氣
- 17 傍通迴盪
- 18 有形有德
- 19 雲升雷動
- 20 一叫一默
- 21 或由之安
- 22 乃用斯惑(○●は韻の換わることゝ示す)

この段では、「九州」の地が、その誕生の原初期において、それぞれに異なる形と地勢とをもち、さらに一州もその區域ごとにそれぞれ異なる地勢をもつこと、したがって、人間は各地にそれぞれの國邑を建てたものの、必ずしも安住する者ばかりでなく、惑亂する者もあることを述べている。すなわち作者は、人間世界の惑亂が、「九州」誕生の際の恣意と無秩序とに淵源するものであるというのである。

吉川幸次郎氏はかつて、「かく人の世が『怨毒』に富むのは、そもそも人間の母胎である自然が、矛盾と相克に富むからであるとする考えが、彼(阮籍、筆者注)にはあったように思われることである。」と指摘されたことがある。「詠懷詩」についてのこの指摘が、賦についても妥當性をもつことを、この段の敘述から私たちは知るのである。

(第二段)

- 1 若觀夫隅限之缺
- 2 幽荒之塗
- 3 物漠之域
- 4 窮野之都
- 5 奇偉譎詭
- 6 不可勝圖
- 7 乃有徧遊之士
- 8 浩養之雅
- 9 凌驚颯
- 10 躡浮霄
- 11 清濁俱逝
- 12 吉凶相招

- 13 是以伶倫遊鳳於崑崙之陽
- 14 鄒子喻溫於黍谷之陰
- 15 伯高登降於尙季之上
- 17 上遊玄圃
- 19 鳳鳥自歌
- 21 嘉穀蕃殖
- 16 羨門逍遙於三山之岑
- 18 下遊鄧林
- 20 翔鸞自舞
- 22 匪我稷黍

第二段落は、神仙の世界の存在することをいう。そして、それは極遠の天地の涯にあるという。すなわち、「隅隈之缺」(天地の隅の缺け目)「幽荒之塗」(九州の外の四夷の地の途)「物漠之域」(太初のままの薄暗く果てしない地域)及び「窮野之都」(上古の帝少暲の都)と呼ばれる所で、これらの所には、風に乗り、空を踏む神仙がいて、清濁吉凶などという俗界の觀念は通用せず、伶倫・鄒衍・伯高氏・羨門子などの仙人たちが遊び、鳳鳥が棲み、嘉穀が生ずる所である。

阮籍の「大人先生傳」に、大人先生のごとき眞人は、四海の外、宇宙の外をもわが庭とするのに對し、世の常人は自分の住む區域にすら通達していないとして、次のようにいう、

鸚鵡不踰濟洛、不渡汶。世之常人、亦由此矣。曾不通區域、又況四海之表、天地之外哉。若先生者、以天地爲卵耳。如小物細人欲論其長短、議其是非、豈不哀也哉。

常人には所詮眞人の世界を理解し得ないのだとするのが、右の文章の主張である。しかし、現實の作者は、その厭うべき常人の世界に生きなければならぬ。「東平賦」の主部における主題は、常人の世界に生きる不安や苦惱が、眞人の世界に遊ぶ想像の中でいかに慰安されるかという所にあると思われる。とするならば、「九州」の地と神仙の世界とを對比して描く第一・第二段落は、この賦の主部の序曲に

相當するものといえよう。

(第三段)

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1 其阨陋則有橫術之場 | 2 鹿豕之墟    |
| 3 匪脩潔之攸麗    | 4 於穢累之所如  |
| 5 西則首仰阿甄    | 6 傍通威蒲    |
| 7 桑間濮上      | 8 淫荒所廬    |
| 9 三晉縱橫      | 10 鄒衛紛敷   |
| 11 豪俊凌屬     | 12 徒屬留居   |
| 13 是以強禦橫於戶牖 | 14 怨毒奮於牀隅 |
| 15 仍鄉飲而作惡   | 16 豈待久而發諸 |
| 17 士惟中(？)   | 18 劉王是聚   |
| 19 高危臨城     | 20 窮川帶宇   |
| 21 叔氏婚族     | 22 實在其酒   |
| 23 背險向水     | 24 垢汗多私   |
| 25 是以其州閭鄙邑  | 26 莫言或非   |
| 27 禮情戾慮     | 28 以殖厥資   |

この段から第五段まで、東平の地理的、歴史的環境、そして住民の氣質、風俗、生活などが語られるが、そこに示される作者のこの地に對する烈しい厭惡感、私たちが驚かせるのである。

作者は、冒頭から、この地の「阨く陋し」い所には、「橫術之場」「鹿豕之墟」があり、そこは「脩潔」の住むべき所ではなく、「穢累」の輩の行く所であるといひ、前述した厭惡感を露に示すのである。ここでいう「橫術之場」とは、「詠懷詩」其五十九に、「朝に衢路の旁に生まれ、夕べに橫術の隅に瘞めらる」と詠われている「續紛の子」らの集う場所であり、また「鹿豕之墟」とは、『禮記』禮器に、「山に居

て魚鼈を以て禮と爲し、澤に居て鹿豕を以て禮と爲す、君子これを禮を知らずと謂う」とある、その禮をわきまえぬ民の住む水郷の謂である。

次に作者は、このように穢累の輩の集まり住む理由を、この地の地理的、歴史的環境に求めることを述べる。すなわち東平の地は、その西に春秋時代齊の邑であった阿（東阿）と甄（甄城）、衛の邑であった戚と蒲（蒲城）とに通ずるが、これらの地は、濮水のほとりに位置する所謂「桑間濮上」の地なのである。また歴史上からは、晋の三卿であった韓・魏・趙がその主家を乗つ取つた所、そして鄭・衛亡國の晋の流行した所である。それが東平の環境だと、作者はいう。

阮籍はその「樂論」で各國の風俗と音樂との關係を論じ、「鄭・衛の風は好淫、故に其の俗は輕蕩、（略）輕蕩なれば、故に桑間濮上の曲有り」と鄭・衛の風俗を批評する。このように好淫輕蕩の風俗であればこそ、東平の邑は、「強禦は戸牖に横にし、怨毒は牀隅に奮う」險惡な状況に置かれ、人々は「仍ねて郷飲して厭を作し」、しかも彼らの惡事を摘發することはとても期待し得ない無法地帯と化しているのだと、作者はいうのである。

この段の後半十句は、高くそそり立つ山と流れ盡きんとする川（汶水）を腹背にしたこの邑の住民が、「垢汙にして私多く」、正義感の一片だになく、己の資産を殖やすことにだけ熱中していることを述べるのである。

(第四段)

- 1 其土田則原壤蕪荒
- 2 樹藝失時
- 3 疇畝不辟
- 4 荆棘不治
- 5 流潢餘滄
- 6 洋溢餘之

- 7 東當三齊
- 8 西接鄒魯
- 9 長塗千里
- 10 受效商旅
- 11 力間爲率
- 12 師使以輔
- 13 驕僕織邑
- 14 於焉斯處
- 15 川澤捷徑
- 16 洞庭荆楚
- 17 遺風過焉
- 18 是徑是宇
- 19 由而紹俗
- 20 靡則靡覩
- 21 非夷鬥式
- 22 導斯作殘
- 23 是以其唱和矜勢
- 24 背理向姦
- 25 尙氣逐利
- 26 因畏惟愆

第四段は、まず土壤と耕作及び治水の荒廢放置されていることをいう。これらのことは、東平の民の怠惰で勤勉を厭う氣質を語るものであろう。

次に作者が述べるのは、東は「三齊」、西は「鄒魯」にそれぞれ接し、いわば文明の中心に位置しながら、ここ東平の地を訪れるのは旅商人であり、そしてこの邑を抑えているのは「力間」（権力とスパイ）と「師使」（軍隊と朝廷の使者）で、學問や文化から全く縁の遠い、野卑な邑であることである。そして同じ濕地帯である荆楚の地に比べて、その風俗において劣るであろうといひ、したがって、この地で彼の地の遺風を人々に伝えようとしたところで、残される結果となるだけだといふ。それは、東平の民が「理に背き姦に向かい、氣を尙んで利を逐う」やくざな輩だからであると、作者は歎いているのである。

なお、「力間」「師使」の二語は、恐らく阮籍の造語ではないかと思うが、東平をとりまく権力の嚴しさを暗示する語であるだけに、苦心して晦澁な表現をとつたものと思われる。

(第五段)

- |    |          |    |       |
|----|----------|----|-------|
| 1  | 其居處壅翳蔽塞  | 2  | 窅邃弗章  |
| 3  | 倚以陵墓     | 4  | 帶以曲房  |
| 5  | 是故居之則心昏  | 6  | 言之則志哀 |
| 7  | 悻罔徙易     | 8  | 靡所瘖懷  |
| 9  | 其外有濁河縈其漚 | 10 | 清濟盪其變 |
| 11 | 其北有連岡    | 12 | 旒幘崎嶇  |
| 13 | 山陵崔巍     | 14 | 雲電相干  |
| 15 | 長風振厲     | 16 | 蕭條大原  |
| 17 | 其南則浮汶湛湛  | 18 | 行深成池  |
| 19 | 深林茂樹     | 20 | 蒼鬱參差  |
| 21 | 羣鳥翔天     | 22 | 百獸交馳  |

最初の四句は、住居の暗鬱なさまをいう。3句に「陵墓」とあるのは、歴代この地を治めた王族のものである。『漢書』宣元六王傳の顔師古注に引く『皇覽』にいう、東平思王家在無鹽。人傳言、王在國思歸京師、後葬、其家上松柏、皆西靡也。

また、『水經』汶水注には、後漢光武帝の子劉蒼の家も東平にあったという。

又南漆溝水注焉、水出無鹽城東北五里阜山下、西逕無鹽縣故城北、水側有東平憲王倉家碑闕存焉。

漢朝の王族の陵墓のここにあったことが、右の記事から知られるのである。

さて、續く四句は、暗鬱な住居に暮らす作者の閉塞孤獨の心理を述べたものである。

そして9句から末尾までの十四句には、そうした心理をいだいて暮らす作者を圍繞する自然がとりあげられるのである。

濕地帯をめぐるようにして、遙か北東に黄河が、またその内側に濟水が流れる。北に稻妻の閃く險阻な山地と烈風吹き荒ぶ大原野、南に汶水とその氾濫により形成された池沼群、深鬱たる森林、そして群翔する鳥たちと馳せてゆく百獸の姿などが描出される。それらの自然は、險阻であり、激烈であり、また動的であって、人に荒寥とした印象を與える風景として描かれているのである。

さて、以上の三段落は、東平の邑と人々の状況、及びその地理的、歴史的環境を餘すところなく語って見事な叙述となっている。作者の對象に迫る眼は、あたかも猛禽が空から獲物を狙うように巨視的で、かつ鋭い。また、その敘述の形式的特徴は、四字・六字句の間にそれ以外の多様な句法を混じえ、對句の多用を避ける、いわば散文的な點にあるであろう。これらの點は、第六段以後、この賦の叙述が、内容的には作者の感情や觀念の世界を語る傾向を強め、形式的には「離騷」式の「□□□□(助字)□□□□(助字)□□□□(助字)□□□□(助字)」という句法をとり、對句を多用するのと、きわめて對照的であるといえよう。

(第六段)

- |    |         |    |        |
|----|---------|----|--------|
| 1  | 雖黔首之不淑兮 | 2  | 儼山澤之足躡 |
| 3  | 古哲人之攸責兮 | 4  | 好政教之有儀 |
| 5  | 彼玄眞之所寶兮 | 6  | 樂寂寞之無知 |
| 7  | 咨閭閻之散感兮 | 8  | 因回風以揚聲 |
| 9  | 瞻荒榛之蕪穢兮 | 10 | 顧東山之葱青 |
| 11 | 甘邱里之舊言兮 | 12 | 發新詩以慰情 |
- 第六段は、太守として東平の地に滞在しながら、民にも自然にも親

しみをいだけず、孤獨な自己を感じている作者の疎外感と、その孤獨の悲哀を慰めてくれるものがない侘しさを述べるのである。次に各句の内容をやや詳しく説明したいと思う。

冒頭の二句は、作者が險惡な民の氣風を厭惡し、山澤の遊賞に慰めを求めようとするものの、山澤もまたその無聊を「彌たすに足り」るものではないことを歎く意である。3と6の句は、古の哲人の貴ぶ秩序ある政教をこの地に施行することは望むべくもないので、道家の尊ぶ寂寞無爲にして物事に關知しない態度をとろうという。そして、7と12の句に、あたかも虜囚のごとくこの人里に捕らわれた身の孤獨を晴らすものとしてなく、いたずらに回風の音に紛らして聲を揚げ、榛の林の蕪穢な姿と東山の葱青の色を眺め、そして村里の昔話を厭いつつ聴くばかりで、せめて新しい詩を作ること<sup>を</sup>で情を慰めているのだと訴えている。

右に見たように、第六段は、作者の鬱屈した心情がよく表わされたものといえよう。また末尾の句は、かかる心情を慰撫するために、作者による詩の制作が行なわれたことを語るものとして注目される。

## (第七段)

- |    |         |    |        |
|----|---------|----|--------|
| 1  | 信嚴霜之未滋兮 | 2  | 豈丹木之再榮 |
| 3  | 北門悲於殷憂兮 | 4  | 小弁哀於獨誠 |
| 5  | 鷗端一而慕仁兮 | 6  | 何淳朴之靡逞 |
| 7  | 彼羽儀之感志兮 | 8  | 矧伊人之匪靈 |
| 9  | 時憊惘以遙思兮 | 10 | 臆飄飄以欲歸 |
| 11 | 飲丕遊於陵顛兮 | 12 | 舉斯羣而競飛 |
| 13 | 物脩化而神樂兮 | 14 | 寧遐觀之可追 |

第七段で解釋上最も問題を含むのは、冒頭の四句である。次にそれ

についての私見を述べてみたい。

1の句の表面上の意味は、嚴霜のまだしげく降る季節ではないことをいうのであるが、『楚辭』の「九辯」の「冬又之に申ぬるに嚴霜を以てす」の句に付された王逸注に、「刑罰刻峻にして重深なるなり」という意を援用するならば、「信に嚴霜の未だ滋からざるに」ということばの奥には、刑罰に象徴される怨毒の奮う事態が、今はまださほど顯著ではないけれども、しかし將來は露骨に人を脅やかす切迫したものになるであろうとする暗い豫測が、隱微に語られていると解釋されるのである。

2の句「豈に丹木の再び榮かんや」の「丹木」は、『山海經』西山經に記述される仙木で、阮籍の「清思賦」にも「丹木を折って以て陽を蔽ふ」と用いられるのであるが、ここでは、人類が神仙のごとく眞實かつ善意でありえた時間や状態を象徴する語として用いられているのではないか。そう理解してはじめてこの句の意が後の文脈に繋がると思われる。

さて3・4の句の問題は、『詩經』の「北門」「小弁」二詩の解釋に關聯するのである。

毛序は、鄒風の「北門」の詩義を左のごとくにいう。今、鄭箋を付して示す。

刺士不得志也、言衛忠臣不得其志爾。(鄭箋) 不得其志者、君不知己志而遇困苦。

また小雅「小弁」の詩義を左のごとくにいう、  
刺幽王也、太子之傳作焉。

毛序の説は、「小弁」の詩を、周の幽王が太子宜咎を廢し、代わつて褒姒の子伯服を立て、宜咎が殺されかけたのを刺つた作とする。

それでは、毛詩説以外の三家詩説の右の二詩に對する解釋を、清の王先謙『詩三家義集疏』により、次に檢討を加えることとする。

「北門」の詩についての異義は、三家ともに遺存しないが、王先謙は漢の王符『潛夫論』中の次に掲げる文を引き、「蔡邕」と二王(王符・王逸)と並びに魯詩を用ふ」といい、さらに「詩(北門)を引いて以て修身俟命の義を明らかにす。蓋し魯説此くの如くならん」と論定しているのである。

君子憂道不憂貧、箕子陳六極、國風歌北門、故所謂不憂貧也、豈好貧而弗之憂邪、蓋志有所專、昭其重也。(讀學篇)

夫處卑下之位、懷北門之殷憂、內見謫於妻子、外蒙譏於士夫。(交際篇)

夫令譽從我興、而二命自天降之、詩云、天實爲之、謂之何哉、故君子未必富貴、小人未必貧賤、或潛龍未用、或亢龍在天、從古以然。

(論榮篇)

すなわち、魯詩説によれば、「北門之殷憂」とは、君子が修身俟命の故に懷く殷憂おほいき憂いという意となるのである。

次に「小弁」の詩についてであるが、韓詩説は遺存せず、魯詩説・齊詩説ともに、周の宣王の名臣尹吉甫の子伯奇の作とする。

伯奇が繼母から憎まれて中傷や詭計により陥れられた結果、吉甫は孝子の伯奇を荒野に追放したので、伯奇がこの詩を作ったとするのが、魯・齊二家詩の説である。

ところで、『孟子』告子章句下に、公孫丑が高子の「小弁は小人の詩なり」ということばの當否を孟子に問う條の趙岐の注にいう、

小弁、小雅之篇、伯奇之詩也。伯奇仁人而父虐之、故作小弁之詩。また、後漢の蔡邕の『琴操』にいう、

宣王出遊、吉甫從、伯奇乃作歌、感之於宣王、宣王曰、此放子之辭、吉甫乃求伯奇、射後妻。

王先謙は右の文を、清の陳椽喬『三家詩遺説考』の説を襲い、魯詩説によるものとする。

陳・王二家が、齊詩説によるものとする一例は、『漢書』馮奉世傳贊の文である。

讒邪交亂、貞良被害、自古而然、故伯奇放流、(略)屈原赴湘、小弁之詩作、離騷之辭興、經曰、心之憂矣、涕既隕之。

これらのことから、魯詩説と齊詩説との相異を求めらば、前者が伯奇の誠を盡くして信じられなかつた哀しみをいうの對し、後者は「讒邪交も亂れ、貞良害せられ」伯奇の放流されたのを歎くことにあるであろう。

以上の檢討から、「北門は殷憂を悲しみ、小弁は獨誠を哀しむ」の句に最も適合する詩説を毛・魯・齊三家の中から求めるならば、魯詩説を挙げたいと思う。「小弁」の詩に對する魯詩説と「哀於獨誠」の句と、兩者はまさしく符合するではないか。

「詠懷詩」其五十一に、「高子は新詩を怨みたりとす」という句があり、阮籍が「小弁」の詩を伯奇の怨みの情を述べたものと見ていることが知られるが、これも魯詩説を是とする補強證據となるであろう。

阮籍が四家詩のいずれを學んだかは、重要な問題で、簡単に判斷を下せるものではない。また、「齊詩、魏代已に亡び、魯詩西晉に亡び」(『隋書』經籍志)といわれている。三家詩の消長、阮籍の家學の系統、そして阮籍の作品における詩説の檢討など、事がらの決定にはさらに研究を必要とすると思われる。

ここで論述を四句の解釋に戻したい。



結局この四句は、人類にとつて、怨毒がその猛威を奮う最も不幸な状態の到来は、まだ將來にあるけれども、神仙世界のごとき眞實かつ善意の幸福な世界の實現は、すでに絶望的である、なぜならば、かの「北門」の詩人が殷憂をいだく己を悲しみ、また、「小弁」の詩の伯奇が獨誠を哀しんだという事實が、すでに古代において、人間の眞實や善意に對する信頼の崩壊が始まつていたことを明らかにするではないか、というのである。

さて、續く四句は、『列子』黃帝篇に見える鷓の故事を引きつ、鳥類でさえも淳朴の心をもつものを、この人類が靈なる存在でなくてよいものであろうかという。そして、さらに後半の六句で、作者は、この俗界を離れ仙界へと飛翔することを述べるのである。

(第八段)

- |            |           |
|------------|-----------|
| 1 乗松舟以載險兮  | 2 雖無維而自繫  |
| 3 騁驪驪於狹路兮  | 4 顧蹇驢而弗及  |
| 5 齊章甫以遊越兮  | 6 見犀光而先入  |
| 7 被文繡而賈戎兮  | 8 識旃裘之必襲  |
| 9 奉淳德之平和兮  | 10 執斯邦之可集 |
| 11 將言歸於美俗兮 | 12 請王子與俱遊 |
| 13 漱玉液之滋怡兮 | 14 飲白水之清流 |
| 15 遂虛心而後已兮 | 16 又何懷乎患憂 |

前半十句は、欲望に驅られ、疑惑と危険に満ちた世の近道を急ぐ人々に、淳き徳の平和な教えを高く掲げたとしても、彼らがこの邦に慕い集うはずのないことをいう。

1の句「松舟」の語は、『詩經』衛風の「竹竿」の詩に、「檜の楫松の舟」とあるのを出典とする。しかし、「竹竿」の詩に對する三家詩

説は遺存せず、また毛序は、これを衛女の思歸をいう詩とするが、この句とはなじまない解釋のように思われる。5・6の句は、『莊子』逍遙遊篇に見える、章甫の冠を斷髮文身の越人に賣りに行った宋人の故事を用い、また7・8の句は、文繡の衣を着て戎に賣りに行つても、毛織物と皮衣が彼らの常服であることを知るだけであることを行い、ともに甲斐のないことに喩えるのである。

かくして、俗界の人々に絶望した作者の魂が、仙界に遊び、道家の虚心の境地を尊び、何の患憂をもいだかぬ心の安息を願望することは、を以て、後半の六句、すなわち「東平賦」の前半部の結びとするのである。

四 「東平賦」の内容(二)

「東平賦」の後半部は、阮籍の魂が諸神に先導され天上の世界を巡遊する中に、その世界にも疑惑と不安をもち、やがて地上に回歸し、隱遁して道家の教えを守り、安らかに生を遂げたいと願うことを述べるものである。

このように仙遊や道家の教えを述べる内容、そして「重曰」という亂辭を用いる形式などの點から見て、賦の後半部が『楚辭』の「遠遊」に學ぶところのあったことが推測されるのである。

(第九段)

- 重曰
- |           |          |
|-----------|----------|
| 1 嘉年時之淑清兮 | 2 美春陽以肇夏 |
| 3 託思臆而載行兮 | 4 因形骸以成駕 |
| 5 遵間維而長驅兮 | 6 問迷罔於苑風 |
| 7 玄雲興而四周兮 | 8 寒雨淪而下降 |

9 忽一寤而喪軌兮 10 蹈空虛而遂征  
 11 扶搖蔽於合墟兮 12 咸池照乎增城  
 13 欣焯燿之朝顯兮 14 喜太陽之炎精  
 15 測虛舟以遑思兮 16 聊逍遙於清眞  
 17 謹玄眞之謏訓兮 18 想至人之有形  
 第九段は、初夏、作者の魂が風に乗って天界を巡遊することを述べ  
 るのである。

ここで私が第一に注目することは、阮籍の天界への飛翔が、4の句  
 に「形骸に因って以て駕を成す」と詠うように、肉體を忘却する一種  
 の忘我の境地において行なわれていることである。このことは彼の  
 「大人先生傳」にも「形體を虚にして輕舉すれば、精は微妙にして神  
 は豊かなり」ということばとして表わされているのである。

さらにまた、天界に到着した作者が、15、18の句で「虚舟を測りて  
 以て遑思し、聊か清眞に逍遙せん。玄眞の謏の訓えを謹み、至人の有  
 形を想ふ」と述べ、道家ことに『莊子』の列禦寇・逍遙遊・天地の各  
 篇に見える虚心の生き方、及び無我・忘我の境地に至ることにより道  
 (絶対の眞理)を體得することが可能であるとする教えを思慕するこ  
 とは、阮籍にとって天上の仙界に遊ぶことの意味が道家的解脱を求め  
 る方向で考えられていたことを示すものであろう。

以上のことは、すでに福永光司氏が「大人先生傳」「清思賦」に材  
 料をとりつつ、「阮籍の神仙思想は老莊思想と密接な關聯をもち、彼  
 の忘我は老莊思想にその根柢を支えられているのである。」と指摘さ  
 れているところである。

次に私が注目したいのは、5、14の句に敘述される天界巡遊のさま  
 が、「間維」「遠遊」に見える語(「玄雲」「九歌」「寒雨」「九歌」)

阮籍の「東平賦」について

「喪軌」「九思」「咸池」「九歌」「増城」「天間」などの語により  
 表わされるように『楚辭』の各篇の表現を模した性格の濃いもので、  
 作者の巡遊する喜びが明確に感じられないことである。これは第十段  
 で明らかになるように、作者が天上の仙界に嫌悪や懼れ、また不安を  
 いだいていることを暗示しているのではなからうか。それを次の段に  
 見ることとしたい。

(第十段)

- |            |           |
|------------|-----------|
| 1 繡靡覩其紛錯兮  | 2 慮彌遠而度逼  |
| 3 竝旋軫於吠滄兮  | 4 若空桑之可即  |
| 5 言淫衍而莫止兮  | 6 心綿綿而未息  |
| 7 集舒譖以鑿戒兮  | 8 賜衆誨之難測  |
| 9 神遙遙以杼歸兮  | 10 畏雙環之在側 |
| 11 咨禽鳥之不羣兮 | 12 悼悠悠之無極 |
| 13 感藜藿之易脩兮 | 14 攝左右之相譽 |
| 15 懼從風而永去兮 | 16 託顛頊於鮒隅 |
| 17 雖琴瑟之畢存兮 | 18 豈聲曲之復舒 |
| 19 慮遨遊以覲奇兮 | 20 彼上騰其焉如 |

前段で天界の東へ旅程をとった作者は、この段では一轉して路を北  
 へととり、司命神玄冥の居所である空桑山へ向かうことをいうのであ  
 る。次にその内容を概略説明しよう。

冒頭の句で合墟・咸池の朝日に輝く「繡靡」なさまに混亂を感じと  
 った作者は、巡遊に許された時間の切迫に急かされ、空桑山へと向か  
 う。その途次、作者の俗世への未練の情を述べるのが5・6の句であ  
 り、それに對し諸神が訓戒を與えることをいうのが7・8・9の句で  
 ある。それに對し作者が、「雙環」を佩びる者が玄冥の側にいるのを

畏れることをいうのが10の句である。11・12の句では、飛鳥の姿ひとつ見えぬ天界の寂しい眺望を悼むことを述べるのである。

後半の13・20の句では、「藜藿」を常食とする隱者の生き方のほうが、左右の諸神の譽めたたえる天界の生活よりも、自分にとつて修得しやすいのではないかと迷い、このまま風に乗って「鮒隔」の山の巔頂に身を託し、永く俗界を去ってしまうのが懼ろしいと訴えているのである。興味深いのは、天界では「聲曲」を自ら楽しむことができないうとする17・18の句で、音楽を愛好した作者らしいことばであるといえよう。

右に見たごとく、第十段では作者の天上の仙界に對する嫌惡や懼れ、そして不安の心情が述べられているのである。

(第十一段)

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1 紛曖曖以亂錯兮 | 2 漫浩浩而未靜  |
| 3 理都繆而改據兮 | 4 竦端委而自整  |
| 5 制規矩以儀衡兮 | 6 占我龜以觀省  |
| 7 眺茲輿之所徵兮 | 8 寔斯近而匪遠  |
| 9 豈三年之無問兮 | 10 將一往而九反 |

第十一段は、現實に戻つた作者が、仙遊の繆みよを自覺し、俗界の間として生きてゆくこととすることを述べるのである。

1・2の句は、天界から現實の世界に戻つたばかりの作者の精神の混亂と興奮を述べたものである。3・6の句は、仙遊に憧れることを繆みよりであるとし、生き方を改めて禮裝に身を包み、顔色を整え、人の世の規矩に従つて行いを正し、龜卜により自己の將來の生き方を深く考えようというのである。そして7・10の四句に、生命の残りも長くないことから、早く故郷へ歸りたいと希望を述べているのである。

7の句の「茲の輿」とは、作者の乗る車であるとともに、その生命を宿す肉體(形骸)を指すと思われる。

以上が第十一段の主たる内容である。

(第十二段)

- |            |            |
|------------|------------|
| 1 顧杲日之初開兮  | 2 馳曲陵而節容   |
| 3 時零落之飄飄兮  | 4 試枯苑之必從   |
| 5 釋遠遙之闊度兮  | 6 習約結之帶契   |
| 7 巡襄城之閒收兮  | 8 誦純一之遺誓   |
| 9 被風雨之沾濡兮  | 10 安敢軒翥而遊署 |
| 11 竊悄悄之眷貞兮 | 12 泰恬淡而永世  |
| 13 豈淹留以爲感兮 | 14 將易乎殊方   |
| 15 乃擇高以登樓兮 | 16 永欣欣而樂康  |

「東平賦」の末尾の第十二段は、作者の俗世に戻る決意と仙遊への憧れを捨てて老莊の教えに歸することとを述べ、そして隱遁して安らかに永き命を樂しみたいと詠うことを、その内容とするのである。

冒頭の四句は、朝日を願ながら丘陵を馳せ、身づくろいし歸途につく、そして、秋の到來とともに、今繁茂する草木もやがては枯死する運命にあるのだと、作者が思うことをいうのである。

ここで注意すべき語は、「杲日」と「曲陵」である。前者は『詩經』衛風の「伯兮」の詩に、「杲杲として出づる日あり」という句を典據とするが、王逸はこの詩句を『楚辭』の「九辯」の「願皓日之顯行」の句注に引き、「日は以て君に喩ふ」というのである。また後者は『詩經』衛風の「考槃」の詩句「考槃在阿」の毛傳に、「曲陵を阿と曰ふ」とあるところの語である。「曲陵」に車を馳せながら「容を飾る」という賦の句からするならば、「杲日」が「君に喩え」られるのと同様、

あるいは何かの權威を象徴するものであるかも知れない。

作者はこの四句に、司馬氏の權威に従って生きていこうとする自己の態度と、時勢の榮枯盛衰を見極めてそれに従う意向とを表明しようとしたと解せられなくもないのである。それが臆測に過ぎないとしても、この四句がそう想わせるような隱微な表現であることだけは確かなことだと思われる。

さて、再び賦の内容を概略説明しよう。

5と8の四句は、仙遊への憧れを捨て、世の中の約束事に慣れ、道家の純一の教えを守って生きてゆくことをいうのである。「襄城」は、『莊子』徐無鬼篇に見える故事の、黃帝が牧馬の童子に天下を治める方途を教えられた所である。

さらに9と16の八句の意を一括して述べるならば、次のごとくである。

世の恵みを被る身であるからは、決して仙遊を思慕したりせず、處世の態度は細心にまた正しく、そして恬淡として泰らかに生命を保とうといい、さらにこの東平の地に久しく逗留したり、「殊方」(神仙の世界に移ったりするつもりのないことと、やがて隱遁して安らかに生を送る願いとを語って、賦を終束するのである。

## 五 「東平賦」の特質

さて、以上の三・四に「東平賦」の内容を検討してきたのであるが、そこに示されているこの作者に特徴的な論理と感情、及び方法を整理するならば、次のようになるであらう。

まず第一に、巨視的に人間を不幸な存在として把握、その根源は、人間を生んだ「九州」の地の不幸な誕生の過程の中にすでに胚胎さ

れ、そして、時の流れは、この不幸な状態を確實に推進するであろうとする、人間とその未來に對する否定的・悲觀的見方を述べることである。これらの點は、特に第一・七段に示されている。

第二に、東平の地の自然と人々とを、この現實世界の典型として把握、その不幸な姿を抉剔活寫し、それに厭惡することである。ここに發揮されている作者の觀察眼の鋭さと描寫力、ならびに第四段の「方間」「師使」などのことばに見られる、意識的に難解にしたと思われる語を驅使する手法は、すぐれて獨自なものと考えられる。これらの特徴は、第三・四・五段に示されているもので、作者の別の作品「元父賦」にも見ることが出来る。

さらに第三に、不幸な人間世界を脱出する方途として、仙遊の可能性が一度は試みられるものの、結局はその可能性を懷疑・否定し、現實の人間世界の中にしか自己の生きる基盤はないのだとさると、作者の現實的な意識が表出されていることである。その際、第十二段の「杲日」「曲陵」などの『詩經』に關聯をもつことばを用い、隱微に自己の意を示すと思われる、作者の寓意的手法に注目したい。これらのことは、第二・七・十二の各段に見られるものである。

ところで、作者による仙遊の可能性の懷疑・否定は、「詠懷詩」其四十一・五十五・七十八・八十などの詩篇に詠われているもの、他の文には見えないようである。この點でも「東平賦」は注目されるべき作品である。

そして第四に、作者は、不幸な人間世界に生きる自己の道を、道家の恬淡無欲の教えに違ひ、天與の生命を大切に享受し、隱者として生きるそれに見出すことを述べるのである。詩の制作と音楽の愛好とが、彼の精神の慰めと喜びであることも、賦中に觸れられている。そ

してまた、第十二段の「竊に悄悄として之れ眷りみ貞う」という句の示すように、世俗においては慎重に生きねばならないとする、所謂明哲保身の態度をとるべきことが表明されている。これらの點は、第六・八・九・十・十二の各段に見られるものである。

ところで、いうまでもないことであるが、以上の諸點は必ずしも「東平賦」にだけ見られる論理と感情、及び方法ではない。それらの多くは阮籍の他の賦の作品、及び詩や散文の作品にも見ることができるところである。

その一例をあげるならば、「東平賦」の最終段落に、「時零落して飄飄せば、枯と苑との必ず従ふを試みん」と詠うのは、時の循環が眼前の人の世の厭悪すべき不幸な現象のすべてを呑み盡くしてくれることを豫測し、そこに安らぎと慰めを見出していることを暗示するものとして讀めるが、こうした論理と感情は、例えば「詠懷詩」其四十二に、「陰陽は舛錯有り、日月も常には融かならず、天時に否と泰と有り、人事に盈沖多し、……身を保ちて道眞を念ふ、寵羅焉んぞ崇ぶに足らん」と詠い、また「大人先生傳」に薪者のことばとして、「夫れ盛衰變化は常に茲においてせず。器を身に藏し、伏して以て時を俟たん。……時は代るがわる存して迭に處り、故に先ず得てしかる後に亡う。……此れに由つて之を視るに、窮達詎んぞ知るべけんや。」と述べることに共通するものである。

しかし、このような阮籍の詩や文に看取される論理や感情についての分析検討は、すでに先學のすぐれた業績があることでもあり、これ以上言及するつもりはない。

私が重視するのは、それらの論理や感情、また方法などが、この「東平賦」一篇の文學的空間に、すべて收斂、凝縮され、そして結晶

されているという事實である。この事實は、「東平賦」が作者の阮籍にとつて、彼の論理と感情とを統合的に述べ、またその獨自の方法を展開することを狙いとした作品であることを語るものである。私はこれをこの賦のもつ重要な特質であると考えるのである。

さて、次に指摘したいことは、「楚辭」と「東平賦」との關聯である。

すでに明の張溥（一六〇二—一六四一）は「東平賦」に「離騷」の影響のあるのを認め、「清遙古雅にして楚騷の遺則有り」と評しているが、現實を悼み、神仙の世界に憧憬し遊ぶことを詠うその内容や、第六段以下の「離騷」式の句法と「重曰」の亂辭を用いるその形式、そして「楚辭」の語彙を襲用するなどの點を見るならば、「離騷」のみならず廣く「楚辭」の各篇から影響されているというべきであろう。

私が右に「楚辭」の語彙といったのは、「楚辭」獨自のそれという意味ではなく、「楚辭」に用いられている語ということであり、それらの中に「詩經」「莊子」などを典據とする語も含んでのことであるが、そうした意味での「楚辭」の語彙と共通する語彙を、「東平賦」から求めてみることも兩者の關聯性を知る上で、強ち意味のないことではないであろう。左に「楚辭」と「東平賦」との兩者に共通の語を列挙する。

- 九州・方圓・丘陵・逶迤（逶蛇・逶迤）・漫衍・大壑・四時・陰陽・隅限・崑崙・鄒子（鄒衍）・文圃・逍遙・鳳鳥・翔鸞（鸞皇・鸞鳥）・脩潔・穢累・紛敷・張禦（張園）・多私・荆棘・捷徑・洞庭・荆楚・遺風・寤懷・崔嵬・澁澁・山澤・寂寞・回風・揚聲・咸池・增城・紛錯・空柔・綿綿・不羣・悠悠・無極・藜藿・左右・顛頂・規矩・三年・嚴霜・殷憂（隱憂）・騫驢・王子喬・玉液・白水・淑清・春陽

(陽春)・間維・長驅・玄雲・寒雨・喪軌(失軌)・空虛・零落・風雨・沾濡(霑濡)・軒翥・悄悄・淹留・登棲(登栖)。※( )内は『楚辭』にそう作ることを示す。

以上の六十六語が兩者に共通する語彙であり、語彙の面から見ても、「東平賦」に對する『楚辭』の影響が窺えるのである。

ところで、『楚辭』の阮籍の作品に及ばず影響は、ひとり「東平賦」にのみ止まるものではない。その「詠懷詩」もまた『楚辭』の影響下にありとすることが出来る。そして、この點については、例えば朱自清氏(一八九八—一九四八)が、『經典常談』の「詩第十二」に次のように指摘している。

阮籍是老莊和屈原的信徒。……這(詠懷詩)、筆者注)裏『楚辭』的影響很大。鍾嶸說他「源出於《小雅》」、似乎是皮相之談。本來五言詩自始就脫不了『楚辭』的影響、不過他尤其如此。

ちなみに、「詠懷詩」と「東平賦」との共通語彙を指摘するならば、左に掲げることである。

九州・九野・逶迤・四時・陰陽・幽荒・伶倫・崑崙・羨門・三山・鄧林・逍遙・鳳皇(鳳凰)・翔鸞(鸞鷟)・橫術・濮上・淫荒(荒淫)・怨毒・捷徑・長風・湛湛・參差・寂寞・回風・揚聲(揚哀聲)・慰情・咸池・增城・太陽・炎精・悠悠・藜藿・左右・焉如・遨遊・嚴霜(凝霜)・再榮・殷憂・飄飄・狹路・王子喬・玄雲・飾容(容飾)・零落・悄悄・恬淡・永世。※( )内は「詠懷詩」にそう作ることを示す。

以上の四十七語が兩者に共通する語彙であり、「詠懷詩」と「東平賦」との關聯性の高さを語彙の面から示すのである。

要するに、「東平賦」が『楚辭』の大きな影響を受けて成立してい

阮籍の「東平賦」について

る作品であることは確實であり、このこともまた「東平賦」の重要な特質とすることができよう。

『三國志』魏書「王粲傳」に阮籍を「才藻豔逸」と評するのを承けて、何啓民氏は次のように指摘されている。

通者・通易・達莊・及樂論等四論觀之、文采風流、豔則豔矣、病在其「逸」、逸則不密。雖然籍才不長於理論、固有造於他體、若東平・首陽・鳩・獼猴・清思・元父諸賦、若大人先生傳……莫不語重意奇、頗事華采(劉申叔語)、眞豔而逸者也。

何啓民氏は、賦を阮籍の「才藻豔逸」なる個性のよく發揮された文體と見ている。蓋し通評といえるであらう。

阮賦六篇中、「東平賦」は最もすぐれた重要な作品であり、作者阮籍の個性を最も十分に發揮した作品と見なすことができるであらう。

## 六 結 語

「東平賦」は、議論的な内容を盛った散體のスタイルと抒情的な内容を盛った駢體のスタイルを、賦の前半と後半とに配し、寓意的、象徴的な表現手法と難解な造語を混じえる特異な作風の賦である。

また、内容的には、俗世への厭悪感、神仙に對する憧憬と懷疑、老莊の教えへの歸順、明哲保身の處世態度の表明、そして隱者的生活への志向など、この作者に特徴的な論理と感情とが、一篇の中に凝縮的に語られている作品であり、そこに私たちは、魏晉政權交替を眼前に控えた時期における作者阮籍の複雑な心情を讀みとることが可能である。

賦は詩に比してより多く論理性、あるいは説明的性格を有しなければならぬから、作者の論理と感情を知ろうと、重要な作品となり

うるのである。その意味でも阮籍の「東平賦」は、彼の人と文學を研究するうえで、きわめて重要な位置を占めると思うのである。

〔付論〕 小論は昭和五十八年十月十日廣島大學で開催された日本中國學會第三十五回大會の口頭発表に基づくものである。なお、その際、司會をつとめられた神戸大學伊藤正文教授から貴重なご教示をいただいた。ここに記して、感謝の意を表したい。

注(1) 「魏晉文學之變遷」の「乙 嵇阮之文」の項。なおテキストは、「商務印書館香港分館、一九七五年五月重印」のものによる。

(2) 阮籍の賦を専論した文獻で私が見ることのできたものは、中島千秋氏「阮籍の『論』と『賦』とについて」(『日本中國學會報』第九集、一九五七年)・同氏「阮籍の『獼猴の賦』について」(『中國中世文學研究』第五號、一九六七年)・藤原尚氏「阮籍・嵇康の賦」(『廣島女子大學文學部紀要』第十五號、一九八〇年)の三篇である。

(3) 『阮籍の生涯と詠懷詩』(一九七七年七月、木耳社)の「第四章 三 阮籍の立場」

(4) 『世說新語』德行篇に「晉文王稱阮嗣宗至慎……」といい、この條の劉孝標注引『魏書』にも「天下之至慎者、其阮嗣宗乎」という司馬昭の言を傳えている。

(5) 「漢文教室」第一四五・一四六號(一九八三年六月・同年九月、大修館書店)

(6) 「阮籍の詠懷詩について」(下)、『中國文學報』第六冊、一九五七年四月、京都大學文學部中國語學中國文學研究室)の「三の1」

(7) 原文は「可以勝圖」に作るが、『阮籍集』(上海古籍出版社)により改めた。

(8) 原文は「仍涉欲而作慙」に作るが、『阮籍集』により改めた。

(9) 「詠懷詩」其五十九の引用の二句の前に「豈效繪紛子、良馬騁輕輿」

とある。

(10) 原文は「靡則靡觀」に作るが、『阮籍集』により改めた。

(11) 「崎嶇」は意未詳。

(12) 原文は「蕭條太原」に作るが、『阮籍集』により改めた。

(13) 阮籍の「達莊論」に「清靜寂寞、空豁以俟、善惡莫之分、是非無所爭、故萬物反其所而得其情也。」といい、寂寞無爲の態度の效用を主張している。

(14) 「近三百年經學名著彙刊」(中華民國六十二年、鼎文書局)によった。

(15) 『文選』卷十八、馬融「長笛賦」李善注に引く文による。

(16) 「阮籍における懼れと懋め―阮籍の生活と思想―」(『東方學報』(京都)第二十八冊、一九五八年三月、京都大學人文科學研究所)の「四―5」

(17) 原文は「將易貌乎殊方」に作るが、『阮籍集』により改めた。

(18) 「採藥無旋返、神仙志不符」(其四十一)「人言願延年、延年欲焉之」(其五十五)「昔有神仙去、乃處射山阿、……可聞不可見、慷慨歎咨嗟」(其七十八)「三山招松喬、萬世誰與期」(其八十)とある。

(19) 前掲吉川・福永兩氏の論文。

(20) 『經典常談』は一九四二年二月の作者の序がある(『朱自清古典文學論文集』(下)一九八一年七月、上海古籍出版社)

なお、『楚辭』と「詠懷詩」との關聯を説くものに、高田淳氏「隱者の思想―清談と文學―」(一九六七年十月、『中國文化叢書』3 思想史)所收、大修館書店)がある。

(21) 『竹林七賢研究』(中華民國五十五年三月、中國學術著作獎勵委員會)